No.203

ティーブレイク

Tea Break

弁理士会役員会秘話その２（回顧録）

会員　正林　真之

広報センターの編集委員の方に勧められて「ノーベル賞の科学　化学編」を読んでみたところ，そこには，いま何かと話題に上るPCR（polymerase chain reaction）が，最初の頃は誰にも相手にされなかったということが載っていた。正確に言うと，相手にされなかったのではない。インチキ呼ばわりされ，完全に抹殺されようとしていたのである。

このようなPCRも，いずれは世の脚光を浴び，最終的にはノーベル賞の対象となったのであるが，その最初の頃は，酷評に酷評を重ねていたのである。ただ，このようなPCRの歴史について，それを掲載した書籍を編集委員の方が勧めてくれたのは，理由がある。それは，その酷評されていた当初の時期に唯一それを評価したのが，PCRについて特許を取得するための明細書をまとめ上げた弁理士であったという事実があったからである。

確かに，この「遺伝子の特定部位を，ほぼ無限大に増幅する」という素晴らしい発明であるPCRも，もし最初にそれを聞けば，そしてまた，その聞いたものが専門家であればあるほど，「信じられない」という先入観が先に働くであろう。ただ，複製することこそが基本的な使命だとされている「遺伝子」の側から見ても，これは願ってもない発明であったように思う。

ところで，こういったPCRの例にもあるように，やはり，後世に与える影響の大きいイノベーションであるものほど，世の中に提示されたときには反対者が多くなるらしい。言い換えれば，反対が多ければ多いほど，それは後世に与えるインパクトが大きいイノベーションであるということになる。

ちなみに以前のティーブレイクでは，「弁理士会役員会秘話」ということで，「体重に応じた弁理士会会費」という案がパッと出て，ポッと消えた話を書いたが，こういった楽しい話はさておいて，実際の役員会では，ものすごくシビアな議論がなされることも少なくない。それが来たるべき未来を見据えて行われる重要な提案なのであれば，なおさらである。

むろん，弁理士会のためにならないようなことをあえてしようとする者は皆無なのであるから，それこそ「弁理士会の将来のこと」を真剣に考えて，かなりの激論が交わされることになるのである。そうして完成された法案の中でも，今度は，通したい法案ほど，そして，弁理士会の将来のために絶対に必要だと思っている法案ほど，反対が多いということになる。これは，先のPCRのところで述べたように，後世に与える影響の大きいイノベーションであるものほど，世の中に提示されたときには反対者が多くなるのと同じような感じである。

ところが，そういった状況下の中で，普段では大層もの分かりの良い先生が大反対をされたり，片や，そもそも通常は反対派という方々が大いに賛成してくれたりするのである。こんな面白い現象の最中にあって，役員という役柄上，どうしても，その先生方に対抗し，強制的に認めさせることになってしまう。けれども，最終的に法案が可決された今だからこそ言える。また，ひとまず弁理士会役員を終えて一会員になった今だからこそ言える。さらに，弁理士会役員を終えていくばくかの時間が流れた今だからこそ言える。大好きだった先生方。そのときは僕らも必死だったんです。本当にごめんなさい。